

ふるさと、風

第79号 (2012年12月)

風に吹かれて (57)

白井啓治

『点の確り打てたのかと振り返れば師走の風』

一年の時の移ろいの速いと感じるのは年寄った所為なのか、それともやるべきことが散満にあるという事なのだろうか。

散満は散漫の変換ミスではない。散り満ちてあるという意味である。辞書にはない勝手な造語である。何故、やる事が散満してしまうのかというと、一つの行動、活動は次々に行動・活動を呼び込むという連鎖反応を起こすからである。

一つの行動が、そこで完結、満足が出来ればそこで終わってしまうのであろうが、一つの行動に十分な満足・完成という事はあり得ないことから、どうしても次を期待することになる。悪い事に次への期待は、今回の不満や未完部分が完成すればいいというものではなく、再チャレンジするのであれば、さらなるものを追加してやろうとする。そこには当然多くの枝葉が生まれてくる。その枝葉の一つを注目しようものなら、それが新たな行動・活動を生み、それがまた・・・と際限なく広がって散満してしまうのである。

果てしない欲求というのは、生きていることの重要な証なので、やるべき事、やりたい事の散満

は良いことではあるのだろうか。

今年春から近い中だとかしかるべき時には、などと政争論議ではない党利の争いで政治を停滞させ、揚句は師走の総選挙である。師走に選挙をしてはいけなくはないが、情けない解散としか言いようがない。おまけに新党の乱立にはあきれ果てる。新党が沢山出来るのは反対しないし、選挙する立場からすれば、正しく政策を掲げてくれれば選択がしやすくなる。

しかし、我慢ならないのは、我欲満載の風見鶏たちの離合集散である。それは政党か？ と既成政党も含め、疑いたくなってくる。

腹を立てながらふとこんなことを思った。議員の立候補者たちは、自分がさも政治のプロであるかのような顔をしているが、それならば政治家どもの報酬を成果主義にしてみたらどうであろうか。年度初めには、その年に自分が行う政治課題とその達成目標値を示し、その実績によって報酬を支払うようにしてはどうだろうか。目標の達成できない議員は当然減給であるし、ボーナスもない。ボーナスは給料の一部と思っている人が大勢いるが、ボーナスとはいわば成功報酬であり、成果のない人には払われるものではないのだから。こうしたシステムをどのように構築するかは別にして、

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談&勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平 ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

考えてみる余地はあるだろう。
この会報が、読者の方々の目に届く頃には、選挙結果が出ているかも知れませんが、選挙に対する基本的な考え方、選挙民としての責任等について改めて見てみたいと思う。

第二次世界大戦後、日本の民主主義は与えられた形で入ってきた。本来民主主義は、民衆の力で掴み取るものなのであるが、与えられる形で入ってきたものだから、民主主義における責任を切実に感じている人が少ないと言える。

その所為か、選挙に対する民主主義としての認識も薄く、何かをしてくれる、あるいは補助金・助成金を持つてきてくれる人を選ぼうとする。持つてきてくれるという補助や助成金は自分たちの払った税金なのだから、持つてきてくれたと有難がることではない。その地域にとって必要なものなのだから、有難がるものではないのだ。補助金だつて言わば優先順位があるのだから、選出議員は優先順位を上げる努力をするのは当たり前前で、選挙民が感謝することではない。

与えられた民主主義における問題点は多々あるが、最も大きな問題点は、多数決に対する認識である。多数決が民主主義から外れて行ったのは、数は力だという考え方である。最終結論を多数決で求めるといふのは間違ではない。しかし、その結果の責任は全員が負うものであり、原発の問題ではないが「あの時私は反対した」というのは免罪符にはならないのである。投票した者、投票権を持った者全員の責任なのだ。

選挙というものも全く同じで、何かの汚職をやつて私腹を肥やした議員がいたとしよう。その時、私はその選挙でその人を入れなかったから私には責任がないと思うのは大間違いなのである。選挙も多数決なのだから、選挙の時に違う人を推したといつても、負ければ当選した人を入れたと同じ事になるのである。民主主義とは、自分自身に課せられた責任が如何に大きいかを確りと考えるこ

とが必要である。

選挙において、落選した候補を応援していたとしても、当選した議員に対しての責任は選挙民の全てにあることを十分に認識して投票に行きたいものである。

深層心理 (1)

菅原茂美

ふるさと「風」の会に入会したのは、07年12月。今月で満5年となりました。主筆始め先輩各位、並びに読者の皆様に励まされ、投稿は先月から、私個人として第60号となりました。過日、初回から50号までを一つの区切りとし、一冊にまとめ、人類誕生以来の道のりを「遙かなる旅路」として、本会から刊行したところです。

私は地方公務員時代、世間の目も厳しく、自由闊達な物言いはできませんでしたが、リタイア後は、自由奔放。何に臆することなく、思いのまま、羽を伸ばして書き続けてきました。

浅学菲才は元より、独断と偏見・厚顔無恥を顧みず、毎月、本誌ほぼ3ページ分を、欠かすことなく筆をとりました。かなり乱暴な物言いで、友人から叱責を受けたこともありましたが、これも激励の言葉と受け止め、今後一層、励んでまいりたいと思います。

物を書くのには、かなりの準備と根気が必要ですが、老体に鞭打つて、何とかして、私個人としての第100号までは、頑張り通したいと思っています。今後とも、ご指導ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

* * * * *

さて今月号は、永遠の課題「人間とは何か？」の一端として、人間行動の基礎となっている「深層心理」に迫っていきたいと思う。私は、因果律に捉われ過ぎというか、こだわり過ぎというか、何事も、ある「現象」が起きるためには、必ず何か、それを引き起こす「原因」があるのでは？と考えてしまう。特に人類の進化については、そう思う。

例えば、ウエストのくびれたナイスプロポーションのレディーに出会うと、それがなぜ「美しい」と感じるのか？。(そうでない方は、我慢して、しばらく私の話に付き合ってください。)

そんなアホな問題に、頭をひねるだけ、時間の無駄ですよ。と、そっぽを向かないで。美しい或いは、嬉しいと思うのには、その感覚を引き起こす、なにか単純明快な「遠因」があるに違いない。と、いつも思う。意識する・しないに関わらず、心の奥底で、現在の自分を突き動かす、なにかが強く働いているのだと思う。協調性や進取の精神こそ、今日の文明の推進役であったと思うが、逆に、調和を乱す強烈な自己主張や、排他的な思考回路も、そして嫌い・憎いなど、ネガティブな心理についても、それを突き動かす何らかの原因が、今でも強く働いているからだと思う。

それ故、現在の人類の心理には、それを引き起こした長年の体験が、知らず知らずの間に、脳裏にこびりつき、或いはDNAに深く刻み込まれて深層心理として、強く後を引きずっているのだと思う。例えば、若い日の「懸命の努力」を、権威ある人に、大衆の前で褒められたことは、いつまでも心に「勇気」として残り、新たな挑戦への励

みとなる。それが逆に、僅かの失敗を、激しく叱責されると、精神的な外傷となり、いつまでも後遺症として残る。嬉しい経験・悲しい経験ともに、それが強いほど後々まで強く跡を引く。

* * * * *

さて本題。東北地方に、「すがり腰」という言葉がある。「すがり」とは、蜂のこと。あしなが蜂など、胸部と腹部の間の腰部はキリリと細い。そのような細い腰が、古来より女性美の象徴とされてきた。サラブレットは、人間が造った美術品だが、女性美は神様が創った最高の芸術作品だと言われる。それ故か、以前ヨーロッパの社交界では、そろそろ、くびれの見られなくなった貴婦人達は、最下部の肋骨を外科切除してまで、ウエストを細く見せたという。それほどに細い腰は、世の殿方を魅了したものらしい。

ならば、その細い腰がなぜ「美しい」と感じるのか？。深層心理の源は？。...

結論は、人類が野生時代に、体毛を失い、体型の輪郭が、遠目にも、はっきり見えるようになること、オスは、ウエストの細いメスを眺めると、彼女は「まだ妊娠していない...」と判断する。即ち、オレの子を宿してくれる可能性のある、希望の星だ...と認識し、称賛する。それが今でも尾を引き、無意識のうちに細い腰を美しいと直感する。野生時代の感覚が、今なお、脳裏を支配している。

【ちよいと無駄話挿入。脱線癖は私の持病ゆえ、ご容赦を。以下、エロチシズムではなく、純粹の自然科学として話題提供。独断と偏見を顧みず、起承転結は無視。思い浮かぶまま私見を述べる。

体毛を失った事が、類人猿を「ヒト」に進化させた原動力と言われる。即ち、木の葉などで見通

しの利かない森林中では、視力よりも「臭い」が仲間同士の通信手段であった。

《人体の細胞表面には、現在でも外界の情報を収集する「センサー（＝受容体）」が1000個以上もあるが、その半数は、「臭い」を感じ取るためのものである。》

ところが、棲息地が、気候変動などで森林が後退し、平原になると見通しが良く効くので、臭い感覚よりも視力が、物を言うように進化した。

動物の皮下の汗腺には、毛穴に沿って臭い物質を分泌する「アポクリン腺」と、体毛に関係なく、水分を多く含み、気化熱で体温調節をする「エクリン腺」がある。動物は殆どアポクリン腺のみであるが、ヒトは熱帯の平原を駆け回り、発汗で体温を調整するエクリン腺が自然と発達した。一方、自分の存在を示し、臭いを発散するアポクリン腺と結びついた体毛は、人体では、腋毛と陰毛のみを残し、自然と消えていった。

《人体で体毛消失が進行する中で、陰毛が残った理由は、直立二足歩行をし、体毛がなくなると両性とも正面から、よく見えるセックスアピールのキーポイントとして残ったと言われる。性成熟表示の信号機だ。全人類の祖先は黒人であるが、黒人女性の小陰唇から膣口にかけての皮膚にはメラニン色素がなく、ピンク色をしているので、陰毛はそれを引き立てる役目もあったという学者もいる。妻の陰毛は、戦場に赴く兵士が「お守り」として、肌身離さず身につけておくためだけのものではなかったらしい。初期の人類は、樹上生活時代の名残というか、自分の存在を示すマーキングを、陰毛を木の枝などにこすりつけることで、通信手段としていたと思われる。》

なお、人類から体毛が失われた原因は、イルカやクジラなど水棲の哺乳類がそうであるように、ある時期、人類も水中生活をし、体毛が失われた。髪の毛は、完全水中ではなかったため、頭部は水上に出っていたので、太陽光の直射を和らげるために残った...という奇説を唱える学者もいる。

更に、楊貴妃の陰毛は、足首まで長かったとの伝説があるが、これは中国特有の大法螺もいところ。白髪三千丈の類だ。ギネスブックではないが、ヨーロッパのある博物館に、世界最長とも言える、陰毛18cmの標本が展示されているという。なお、成長期に肥満体になると、陰毛は極度の発育不全となり、時により無毛症となる。

腋毛については、陰毛とともにフェロモン発信源。過剰分泌や洗浄不全だと、常在菌が繁殖し、悪臭を出し「腋臭症（優性遺伝）」となる。アルコール消毒で、常在菌を殺菌するのが定法である（なお湿性耳垢は耳の中にあるアポクリン腺からの汗が原因）。また、女性が腋毛を剃る習慣は1915年頃、米国でノースリーブが流行り出した頃からと言われる。なお、楊貴妃の腋毛臭は、魅力的な非常に良い臭いであったという。又、明朝第3代皇帝「永楽帝」は、後宮女性達にわざわざ厚着をさせ、動き回らせて汗をかかせ、気に入った臭いの女性を選び、寵愛したという。

また余計な話で恐縮だが、処女膜は、人間とモグラのみに存在すると吹聴したのは、三島由紀夫が「週間明星」に連載したエッセイ「不道德教育」。これも真つ赤な嘘。処女膜は、人間の他、犬・猫・馬・象・チンパンジー・コオモリ・モグラ・イルカ等多くの動物に存在する。名のある文豪の知ったかぶりは、迷惑千万である。》

さて、体毛の豊かな動物たちは、瞬発力はあるが、エクリン腺が少ないため、長距離走は非常に弱い。そこが体毛を失ったヒトの狙いどころ。しつこく動物達を追い回し、体温上昇でダウンしたところを捕獲。大量の肉を確保・栄養改善が図られ、それが大脳発達に結びついたと言われる。共同作業で狩りをする為、言語や道具の改良が必要となり、それが一層大脳進化に拍車をかけた。それにしても人類は、聴覚・視覚・嗅覚・味覚・触覚のいずれもが、野生の動物に比べ、こんなにも退化して、よくぞ、今日まで生き延びられたものと、真に不思議に思う。

人間の聴覚は、聞き取れる音域は狭く、歳をとるとすぐ鈍る。超音波・犬笛など役に立たない。視覚は老眼・近眼・乱視などあまりにも障害が多すぎる。嗅覚は、嗅覚神経にウイルス感染などで機能低下も甚だしい。旦那が「変な残業」で、香水の移り香を残し帰っても、鼻の鈍った奥方は、『遅くまでお疲れ様』：と3本指をつけて、御迎えをする。味覚もまた退化著しい。『あーおいしかった！』と毒キノコを、タンマリ食べ込む。動物は、よしんば毒を口にしたとしてもすぐ吐き出す。触覚は、着物等を着たせいか、あまりにも鈍い。地震など動物は鋭敏に反応するのに、人間は震度1〜2ぐらいでは『アラ！地震があったの？』とくる。それゆえか、五官の退化が、代償的に知能を發展させた：とも言われる。】

* * * * *

さて、生存のための重大な任務は、一に食糧調達。二に子孫を残す為の生殖活動と言えよう。原野を遊走中、茸や果実など見つければ、小躍りして喜ぶ。そして、オレの子を宿してくれそうな相

手が見つかれば、それは夢か幻かと大喜びしたに違いない。果実も、細い腰も、この上なく美しい存在であったはず。自分が強く求めているもの、こよなく愛するもの：これがこの世で最も美しいものと思つたに違いない。私にとつて柎目の整った碁盤は、どんな財宝にも勝る究極の「美」であり、そして流線形の自動車や、力強さのD51はこの上もなく美しい。ジェット旅客機の後退翼の機能美には、ほればれする。

そして、細い腰だけではなく、「脚」の長いのがカッコいいと感じる深層心理は、人類誕生の頃、森林後退で、やむなく樹上生活から地上に降りた類人猿、即ち我々の祖先は、当然、短い後ろ足で立ち上がり、猛獣ひしめく原野を見渡し、いち早く危険を察知し、早く逃げなければ生きていけなかった。森からノコノコ出てきた人類など、猛獣にとつて格好の餌食。ということ、より脚が長ければ、より遠くまで見渡せ、食事の時間・逃げる時間を計算でき生存に有利に働く。生存に有利に働くものこそ、進化の基本原理であり、これに優る美しいものはないはず。文明の進化した今日、特に脚が長くなるとも、生活に特段の支障はないが、野生時代、生き残るための強力な進化上の推進力は、いまだに強く働いている。それゆえ、テニスの超美脚シヤラポア選手がもてはやされる。人類は、700万年かけて、身長が、1.8m伸びた。

また、「乳房」についても、常時飢餓状態が続いた太古においては、大きければ、タツプリ皮下脂肪を蓄え、栄養豊かで、我が子をしつかり育ててくれそうだ：と、オスの目には見えたに相違ない。もしかしたら、オスにとつて、大きなお尻に大きな乳房は、パートナーを選択する決定要因であつ

たに違いない。オスは闘争のため、瞬発力に必要な即戦力の脂肪燃料を「内臓脂肪」として蓄え、メスは妊娠・分娩・子育てのため、臀部周辺に、長期作戦用として「皮下脂肪」を蓄える。(もし、マラソンの距離が、今の2倍なら、男性は女性にかなわないだろうとも言われる。)

一方、人類の祖先は、搖籃の地アフリカを飛び出し、世界各地に拡散したが、ヒマラヤ山脈の北周りでアジア大陸に進出したモンゴロイドは、シベリアの奥地まで足を伸ばした。しかしそこは、マイナス40℃以上にもなる極寒の地。鼻が高かったり、手足が長かったりしたら凍傷にかかり、生きていけない。それゆえアジアでは鼻の低い、手足の短いズングリムックリ型に進化していった。おそらくそれが理想形であり、最も美しかったに違いない。今日では、世界交流が盛んで、それが潮流となり、脚の長いのがもてはやされる次第となった。短足やダンゴ鼻こそ、世が世であれば、最高にカッコいい大スターであつたはず。

同じように、世界の民族によつては、太つているのが最高の「美」と言われる国もあるという。長年飢餓状態が続くと、皮下脂肪をタツプリ蓄えた人こそ、あこがれの的であつたに違いない。

【古代中国では、遊牧民等による北朝政権時代は、豊満な肉体の女性がもてはやされ、漢民族など南朝系政権時代は、細みの女性が、宮廷でもてはやされたという。楊貴妃はかなり豊満な肉体であつたという。そして現在、アラブ・西アフリカ・北極圏の原住民は、栄養豊かな豊満な女性を「美」の極致として愛し、先進国・東アジア・東アフリカでは、細みの女性を好む傾向が強いと言われる。また、今日、国民の肥満体(BMI³⁰以上)の率

は、日本3%、アメリカ30%と言われる。】

また、旧石器時代の洞窟壁画には、動物の絵は、かなり太目に描かれており、豊かな狩猟成果を祈願したものとされる。そして、狭い画面に、バイン・小型の馬・イノシシ・鹿など多くの種類の動物が、多数描かれており、環境周囲に、多数の動物が繁栄することを願ったのであろうとも言われる。また、ライオンやクマなど食用とは思われない動物も描かれていたりするので、洞窟壁画は、部族の中のシャーマンが、トランス状態（催眠により恍惚・こん睡）で、狩猟のための呪術的意味で描かれた：とも言われる。

またある洞窟壁画には、恐らく描いた本人の、指を開いた掌（てのひら）が描かれており、何とその指の数は6本であった。現在トルコには、手の指6本の人は多数いるという。

《イギリスのチャールズ元首相も手の指は6本であったという。元々人類の手の指は、祖先を辿れば魚類時代の魚の胸ヒレの鰭条（きじょう）が変化したもの。多数の骨があったものが、進化とともに退化して霊長類（サル目）は5本に、偶蹄類は2本に、奇蹄類はサイが指3本、馬は中指1本に収斂された。ヒトの指6本は別に変なことではなく、先祖返りの一端であり、多毛症や乳房4個などと同じで、しばしば見られる現象である。》

* * * * *

現在、我々の心理を支配している大源（おおみなもと）は、恐らく何百万年も前の、太古の原始時代に、その原因があるに違いない。地球上に生物が誕生して40億年。単細胞時代30億年で、多細胞生物が誕生してまだ10億年しかたっていない。動物が誕生して6億年、哺乳類誕生が2億年

前。霊長類が誕生して7000万年。そして直立2足歩行を以って人類誕生とするなら、わずかに700万年である。これだけの長い歴史を基礎として、今日の人間行動が方向づけられている。

よって、生きる基本となる野生の本性は、メソポタミアに端を発した、わずか1万年そこそこの人類が築いた文明などで、簡単に消え去る軽薄なものではないと私は信じる。後からの「着け足し」みたいに発達した薄皮まんじゅうの「大脳皮質」など、理性を司るかなんか知らないが、生きる基本の原始的な「脳」（＝旧脳・即ち食欲・性欲など本能を司る）の前で、大威張りできる存在ではなからう。わずか5mm足らずの厚さの大脳皮質など、まさに発展途上の新参者に過ぎないと私は思う。なぜならば、エジプト文明など既に5千年の文明の歴史がありながら、同じようにインドや中国など、太古よりいかにほど文明を重ねようが、争いのない安定した平穏な庶民生活など、ほど遠い現状ではないか。

理性が支配し、争いの元凶となる貧富の格差がなく、皆が平等に平和に暮らせるまでに文明はいまだに進化していない。何百万年も続いた野生根性の闘争本能は厳然として、根強く現代にのしかかっている。人類は、誕生から今日までの99%を過ごしたアフリカ時代を、今日なお引きずって、生きていかなければならない。深層心理を生み出す遠い過去は、今なお厳然として、我々の行動を支配している。来月は、闘争や略奪など、人間の醜い深層心理の起原に触れたい。

香丸町の聖徳太子さま

兼平ちえこ

当会報前月号（第七十八号）より、石岡のおまつりの出し物で神輿に供奉する山車人形にスポットをあて、ご紹介しています。

今回は香丸町の聖徳太子さまです。石岡駅前通りを前進していきますと信号のある丁字路になります。右に曲がりますと、そこは香丸町通り。左は中町通りになります。

府中平村と呼ばれた江戸時代は水戸街道の宿駅として栄え、宿場中心の香丸町と中町は明治・大正と商都として栄えた中心商店街で、どちらかと言えば香丸町は御売、中町は小売が主で、それが昭和に入ると両方の街並みは対象的な違いになって行きました。それは昭和四年の大火によって石岡駅前の八間道路（御幸通り）から南側の中町は、ほぼ全焼し、翌年の復興で歩道とガス灯型街路灯のあるモダンな街並みが出現し、一新された商店街は銀座のようであり洒落た洋風の看板建築が（その一部が現在登録文化財になっています）軒を並べました。

一方の香丸町は江戸、明治の屋並みが残り、土蔵造りの店蔵と和風建築が立ち並び、中町は近代的でモダン。香丸町は伝統的で重厚といった雰囲気で大別されたそうです。

今回の香丸町の山車人形について、知人を通して香丸町の中島様をご紹介頂きました。中島様は石岡大火の数年前のお生れで九二歳。お伺いした時、奥様とお揃いでまるで翁様と姫様のように優しく、満面の笑みでお迎え頂きました。

お話しするよりも「私のおぼろげな記憶と、色々な記録と、知り合いの方からのお話などから書き

しるしたものがあるので」とすくつと立ちあがり、鬘鑠として背筋を伸ばしての身のこなしに驚いている内に、お持ちになりました。上等な半紙二十八枚に絵いりの達筆な毛筆で「香丸町のお祭り年番その他」中島一雄著とありました。ここにその一部を抜粋させていただきます。

第一回 年番

明治三十五年(十六町内)に年番制が決まって香丸町は抽選で、最後となり(十六町内)最初の年番は大正六年十月九日。私の生れる前の事でわかりません。この年は香丸町では屋台を出した様です。提灯掛のワクを立てて香丸町の弓張提灯が四、五十ヶ掛けてあつて夜にはローソクが入つてきれいでした

昭和八年九月九日 年番

会所は、はし本旅館 お假屋は藤田タンス店あと(今の友水燃料)朱塗りのきれいな橋をつくり立派なお假屋でした

催し物として舞台を二ヶ所設け東京より万才、曲藝等の藝人をよんで催し夜の十時頃までにぎやかでした。その頃は全部出ても十六町内で全部出ること程んとなく山車が三、四台に獅子が八、九台が普通でした

昭和二十四年 九月九日 第二回年番

戦後商店界も変わり番頭さん小僧さんも程んどいなくなりお御輿をかつぐ手もないので土浦から天王様用とかの牛車を借りて来てお御輿を迎えまし

昭和三十年五月 獅子頭新調

昭和三何年頃かはつきりは分からないが山車を作ることになり香丸では手がないので小さい簡単な山車と云うことで国分町、桜井万吉さんに依頼す女の子も出られる様にと安くて軽いのと云うので彫刻は全全く腰板はベニヤ板に色を塗つて人形はないので角蔵の薦被り(こもかぶり)でしばらくしていつまでも、こもかぶりでもおかしいので人形にしよと云うことになった

丁度老萬圓札が出始めた頃で老萬圓札の人物が聖徳太子だったので聖徳太子の人形を造つた

昭和三十九年九月九日 第三回年番

この年、お祭り前の盆踊の晩、總社宮拝殿焼失。茅葺屋根だった拝殿の茅屋根に子供の火花の火の玉飛込んで本殿かろうじて残つて拝殿焼失す。祭禮は現在の星の宮の所へ假拝殿を造つて執行す。香丸町ではトラックの飾り幕をいろいろと新調してトラックを飾りお御輿を迎える

昭和五十三年九月十五日 第四回年番

出し物 山車 この年は御輿をかつぎました。この頃になると他町からも多数の手伝へが入り又山新さんで各支店から社員さんが揃いの浴衣で参加して下さいました

この頃になると年番町以外からも山車や獅子の参加希望もあり大きな町内では山車と獅子と出す様になり石岡精工舎でも東町として山車を出す様になった

政治、文化に偉業を成し遂げ、飛鳥文化と云う華を開化させたとされている聖徳太子さまのもと、喜びを分かち合う香丸町の皆さんの誇りと心意氣

が感じられました。

中島様には貴重な資料をご提供下さいまして感謝と御礼を申し上げます。そしてご協力頂きました町内の皆様有難うございました。

(参考資料) いしおか 昭和の肖像

・大木襲う タヤけこやけ ちえこ

**ギター文化館20周年記念行事も無事終了することが出来ました。
今後とも皆様方の変わらぬご支援よろしくお願い申し上げます。**

ギター文化館2012年コンサートシリーズも残すところ
12月9日の尾尻雅弘・角圭司ギタージョイントコンサート
(15時開演)となりました。

本年最後のコンサート、大勢の皆様のご来館、
お待ちしております。

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

四年ほど前に長年勤めていた会社で停年を迎えました。完全リタイヤはもう少し先と考えてはいますが、当然他の暇な年寄りの仲間入りをしたわけですから、この余った時間の処し方を思索するうちに、カメラ片手に身近なところに眠る神社や石仏、古びた家屋などを見て回ることが好きになりました。

そして、2年前の夏からこの周辺に眠る埋もれた歴史を掘り起こすことをテーマに、ブログ「まほらに吹く風に乗って」を立ち上げ、毎日欠かさず記事を書いてきました。このブログのタイトルを決めたのも「ふるさとに吹く風や香り」を読む人にも感じて欲しいとの思いを込めたものです。

一方、こちらの会のテーマも「ふるさと」の歴史・文化の再発見と創造を考える」であり、同じ方向性を持っていると思っています。この会報に記事を書くことは大変うれいことですし、諸先輩方の記事を見習って書いてみようと思き始めてみました。しかし、とても読むに耐えない無味乾燥な文章になってしまいました。そこで、賢明な読者の皆様には申し訳ないのですが、背伸びをしてもしかたがないので、暫らくは今までブログに書いてきた内容などから面白そうなところを拾い出し、書き足りないことなどを加えて、私なりの書き方で書かせていただこうと思っています。自分で感じた興味あるテーマなどを感じるままに書いてみたいと思います。

今回はまず「古代製塩」についてです。

これは昨年から霞ヶ浦の南側にある阿見町、美浦村などの探索をある程度終え、今年1月に小野

川に架かる古渡(ふつと)橋を渡り浮島へ行った時のことです。車の窓越しに「広畑貝塚」という案内立札が目が止まりました。

私は良く事前調査などせずに出かけ、何か日常と少し異なる何かを見つけると立ち寄り寄ってみることが散策時の習慣になっていっています。そこで何の気無しにその貝塚へ立ち寄り寄りました。そこは霞ヶ浦の水面からそれ程高くない場所ですが、ただの草原が広がっているだけですが、そこに書かれていた説明文を読んで衝撃を受けました。

書かれていたことを要約すると、「この貝塚は標高1・5〜2・0mの比較的低地にあり、明治二九年の発掘調査で、縄文式土器と弥生式土器が層的に発見された。そして特に注目されたのが出土された土器片から多量の炭酸カルシウムが検出され、これが縄文期の土器だったことからここが縄文期における土器製塩の遺跡であると認定され、国の史跡に登録された」という内容でした。

これには二つの驚きがありました。一つはそれまで抱いていた縄文期の水面の高さが私の思っていたより低かったのではないかということ。もう一つが縄文期にすでに塩がこのような場所で作られていたということでした。

少し話は飛びますが、常陸国風土記の信太郡のところに、「昔、倭武の天皇が海辺を巡幸して、乗浜に至ったとき、浜にはたくさんのお茶が干してあった。そのことから「のりはまの村」と名付けられた。

(中略)

乗浜の里から東に行くと、浮島の村がある。霞ヶ浦に浮かぶ島で、山が多く人家はわづか十五軒。七、八町余の田があるのみで、住民は製塩を営ん

でゐる。また九つの社があり、口も行ひもつしんで暮らしてゐる。」(口訳・常陸国風土記より)と書かれています。

ここ浮島は、名前にあるように、昔は今の霞ヶ浦に浮かぶ島だったと言われています。それまで私は、いろいろの文献で縄文海進という言葉を目にしており、古代に流れ海と呼ばれていた霞ヶ浦の湖面(当時は海面が縄文時代には今より4〜5m程高かったものと推測しておりました。そして、津波などの影響を考えるのに有効な Flood Maps というソフトを使って、現在の水面を5m程上昇させ、古代の地形を推測して楽しんできました。このような地形を想像すると、貝塚の分布や昔の地名や言い伝えなどが想像しやすくなり、それまで不明だった多くの事が見えてくることを知って喜んでいたのでした。

しかし、この貝塚の標高は1・5〜2m程度しかないのです。これはひとつの驚きでした。即ち、三千年ほど前の水面でも私が思っていたよりも低く、せいぜい+1〜2mくらいではないか考えられるということでした。もっとも縄文海進のピークは今から六千年ほど前といわれていますので、三千年前には1〜2m程高かったというのもおかしなことではないかもしれません。こちらの方は今回の話のテーマではありませんのでこれくらいにします。

さて本題は、もう一つ驚きである「縄文時代に製塩が行われていた」ということです。

霞ヶ浦が昔は海であったということですから、この場所に大昔から縄文人がたくさん住んでいたことには陸平(おかだいら)貝塚などを知っていましたので、特に驚きはありません。しかし、驚いた

のはこの製塩が弥生時代や縄文時代晩期ではなく縄文時代後期だということなのです。そして調べてみると、この付近が日本で一番古い製塩土器の発掘場所（広畑付近では前浦遺跡（稲敷市）や法堂遺跡（美浦村）などでも発見されている）だということがわかったのです。常陸風土記に書かれているのは今から千五百年ほど前のことであり、三千年以上前の縄文期に塩造りが行われていたとは思ってもいなかったのです。これは私の知識の無さの所以でもあると思いますが、それまで、日本で海水から塩を作ったのは、稲作が始まるようになって塩が必要になったからだと思ってきました。

常陸国でも鹿島灘の塩田で作られた塩を府中など内陸部に運ぶ塩の道と呼ばれる道があったといえます。敵である信玄に塩を送った上杉謙信の話などが思い浮かびます。このように塩はなくてはならないものと考えられますが、大昔には塩を必要とせず、稲作の始まりで必要性が高まったものと思っていました。もちろん稲作もかなり昔からあったようですので、これもあながち間違った解釈でもないかもしれませんが、知識不足で分かりません。

私たちが塩作りとって思い浮かべるのは、砂浜に作られた塩田に海水を何度も撒いて天日で乾かす方法で、昔は大変な重労働な作業とされて、一種の身分の低い人を奴隷のようにこき使っていた時代が長く続いたような記録が見られます。例えば、説話「安寿と厨子王」（山椒大夫）では安寿が人買いの手で汐汲をさせられ苦労した話があります。また、美浦村に残る伝承話「信太郎太郎伝説」では平将門の曾孫である小太郎が陸奥国の塩商人のところで潮汲をさせられる話も残さ

れています。

では、古代の塩作りはどのように行われていたのでしょうか。これを調べてみると結構面白いことがわかってきました。

まず、淡路島の神戸寄りの海岸に「松帆の浦」という場所があります。万葉集にこの場所の情景を歌った歌があります。

名寸隅の 船瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の浦に
朝風に 玉藻刈りつつ 夕なぎに “藻塩” 焼き
つつ 海人娘子 ありとは聞けど 見に行かむ
よしのなければ 丈夫の 心はなしに 手弱女
の 思ひたわみて 徘徊り 我れはぞ恋ふる 舟
楫をなみ（万葉集巻六）

（訳）名寸隅の船着場から見える淡路島、その松帆の浦では朝風の時には玉藻を刈り、夕風の時には藻塩を焼いたりしている美しい漁師の少女たちがいるとは聞く。しかしその少女たちを見に行く手だてもないので、雄々しい男子の心も、手弱い女のように思いしおれて、徘徊し、私はただ恋い焦がれてばかりいる。舟も櫓もないので

そして、これを基にしたと思える歌が小倉百人一首に選者「藤原定家」の歌として載っています。

来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに
焼くや 藻塩の身もこがれつつ

（訳）松帆の浦の 夕風の時に焼いている藻塩草のように 私の身は 来てくれない人を想っ

て 恋焦がれているのです。

このように、海に生える海藻である玉藻（ホンダワラなど）を刈ってきて、夕方の風が凪いでいる時に藻を焼いて塩を作っていたことが歌われています。その他にも万葉集には、この藻塩に関していくつも歌が残されています。

草枕 旅にしなければ 思ひ遣る たづきを知ら
に 網の浦の 海人娘子らが “焼く塩” の 思
ひぞ焼くる 我が下心（巻一・五）

志賀の海女は 藻刈り “塩焼き” 暇なみ 櫛笥
の小櫛 取りも見なくに（巻二・二七〇）

須磨人 海辺常去らず “焼く塩” の 辛き恋を
も 吾はするかも（巻十七・三九三）

など、藻塩を焼いて塩を作っていた事が歌われています。

では、この藻塩焼き製塩とはいったいどんな方法だったのでしょうか。

この製法については宮城県塩釜の御釜（おかま）神社で毎年7月に行われている「藻塩焼神事」がその方法を伝えています。

大きな鉄製平釜の上に竹を編んだ棚を設け、海藻（ホンダワラ）を広げます。その上から海水を注ぎ、これを煮詰めてかん水を作り、それを煮詰めて塩を作ります。これも今では鉄の平釜を使っていますが、古代は薄手の土器が使われていたようです。また、藻塩焼くという言葉のように、海藻を焼い

た灰にまた海水かけて、煮詰めて固めたなどの説もあると言われ、藻塩製塩の方法も一つとは限らないようです。

この塩釜周辺も古くから藻塩による塩作りが行われていたといわれ、里浜貝塚などから縄文時代晩期の製塩土器が発見されているようですが、時代的にはこの霞ヶ浦の製塩よりかなり後の時代といわれているようです。またこの塩釜で藻塩を焼く煙を歌った鎌倉初期の歌が残されています。

見し人の 煙となりし 夕より 名ぞむつま

しき 塩がまの浦 『新古今集』巻八

このように古代の藻塩製塩方法は豊臣秀吉の朝鮮出兵により韓国からもたらされたという入浜式塩田による製塩方式にとって替わるまで一般的な方法だったようです。前述した安寿と厨子王の話には安寿は朝晩に海水汲みをさせられ、昼間時間があつた時は、藻塩焼きの手伝いをさせられたことが書いてあります。藻塩焼きのは海女の仕事で万葉集ではこの海女が「塩を焼く」と「恋焦がれる」などを想像して歌われているものが多いので、どのような労働になっていたのかは推察するのみですが、歌にうたわれたほど甘い世界ではないと思います。

一方、塩田法はさらに過酷で塩商人などが暗躍していたようですので、とても歌など読めない世界だったのでしょう。

話を最近の話題に戻しますが、この藻塩製塩はミネラル分も豊富でおいしいそうです。復活して作っているところもあるようですので試してみるのも良いかもしれません。

しかし日本の塩も今では自給率は12%程度で、ほとんどを輸入に頼っているそうです。また世界を見ると、「塩は岩塩を採掘するもの」という考え方がほとんどで、海から塩を造るという日本の常識は、世界の常識では無いそうです。いろいろな考え方を知らなければならぬようです。塩の使い道も食塩というよりは、身近なものでは石鹼、化学薬品、紙やパルプなどの原料になる苛性ソーダなどに多くが使われているといえます。

さて、最近のニュースで知ったのですが、海藻がたくさんある海中の場所を「藻場（もぼ）」というそうですが、この藻場が海水温の上昇で大変なことになっているのだそうです。

九州南部の沿岸に広がっていた藻場の消滅が、今は九州沿岸全域に及び、四国や山陰沿岸にも影響が出始めているようです。これは藻塩などの問題よりはるかに深刻な問題です。藻場は魚の卵を産み付ける場でもあり、くらげなどのえさにもなっています。くらげが大量に発生してどんどん北上し始めているのです。このような古代製塩法も、古き縄文時代に思いを馳せるだけではなく、自然環境の変化などにも関心を持つきっかけになればうれしい事です。

わかれ

伊東弓子

間も無く、今迄にない別れがきょうとしている。此れ迄にも人との別れは沢山あった。姉、妹の死は私の幼い心に何かを残したろうが、意識と

してない。小学校の頃、疎開していた友が次々に都会へ戻って行った時は淋しかった。中学校卒業後、就職や結婚の為に故郷を離れていった友達との別れ、好きな人との別れ等は、未来に向かって進んでいくのだと自分に言い聞かせ、悲しくはなかった。早かった父、老いた母、祖母、叔父、叔母と慈しんでくれた身内との別れは辛かった。子供達は家族を作って独立していった喜びの別れだった。今回友との別れは一入だ。不安で不安で仕様がないう毎日。何故なのだろう。独身から結婚へ、その後様々な女の山、坂を越して老人となった四十八年を共有してきたからだろうか。

貴女と始めて合ったのは四十年の春。大学卒業と同時にご主人と村に来たばかりの貴女。青年会主催の歓迎会の席でした。都会風の綺麗な人というのが印象でした。空屋を借りて住んでいる。釣瓶で水を汲んだり、屋根から月が見えたり、古い家での生活も楽しげに話してくれました。その後合った時（伊藤さんですね。保母さんをしていゝんですってね）（はい）それが最初の会話でした。中学校の産休代替の先生として勤めた時、子供さんを園で預かったのが切っ掛けで子育ての話が始まりました。同じ年齢の子がいたので地域での子育ての事も考え合う機会を作って行きましたね。

四十七年の夏、私は社宅に住むことになり、二百メートル位しか離れていない貴女の家と近くになりました。どんなに疲れていても貴女の近くの商店で買い物をして、一寸寄ってお喋りするのを楽しみました。あの頃の貴女は家庭の事を確りと熟して、将来に備えて力を貯えていたのです。末の子を身ごもった時、貴女も仕事を続けるの、一〜二年休む事も大切と話してくれました。無理を

通した私に（そう決まったら手伝うよ。と末っ子を預かり、家の片付けをしてあげる）という言葉に甘えました。末っ子を迎えに行つて貴女の笑顔に合う喜びと、家に置かれて三行のメモを読み楽しむに頑張りました。夜は遠く迄塵を置きに行つたり、草影で交代に用をたして、老婆の話に大笑いしましたね。

酪農地帯が工場地帯に変わっていく中で、酪農を考えていた二人の方は代替地に移つたので空いた家を譲つて貰つたということでした。それを移動し自分達の家を持つことになったと張り切つてました。コロコロ、コロコロ大勢の人の手で、五〇六百米の距離を一軒屋が動いていきました。私と貴女の子と八人は狭い社宅で遊び、夕食を食べべて寝ている姿に、私も万分の一位の役に立つた様な思いでした。私の住む桜塚から貴女の住む富士峰迄何度通つた事でしょう。辛い悩みを抱え、息づまつたと、今より暗い道を歩いて、走つて合いに行きました。（今は街灯が出来道も舗装され工場、四社、施設一つ。人家五十軒近く出来、白雲荘、塵処理場も出来た）その都度丁寧に相手をしてくれました。若い人への指導に行き詰まつた時は、一冊の本を読み、語り合い、実践との結びつきを考え合う勉強会を持つてくれました。子育ての話し合い、粉石鹸、食物、添加物の勉強会も持ちましたね。良い物をグループで購入したり、読み聞かせ、子供達と凧上げ（当時第二トールランドは一軒も家はない）里山歩き、夜の道歩き等についてもお供をしてくれたのは御握りでした。小学校高学年になるにつれて男の子、女の子が離れていきました。十年たつぷり子供と遊んだ時でしたね。三十代に入ると自分の道を開くべき勉強が始ま

りましたね。石岡の先生の所へそして茨大の聴講生として古文書に取り組み、新しい世界の話しを聞かせてくれる中で、学習することを進めてくれました。でも私は子供の成長と共に悩みも大きくなり口を塞いでしまう事が多くなりがちでした。そんな時（いつも楽しんで話をする貴女、話しが出てくる迄待つてね）と見守つてくれていました。午後の陽を受けて園舎の脇で、優しい貴女に抱き付いて泣きたかつたのを我慢しました。

その後村での活躍は沢山ありましたね。実力に伴わない扱いが多い事、村内での理不尽な見方にも腹が立ちました。貴女は負けずに金銭ではないと次の道をどんどん開いていきました。明治、大正、昭和を生きて活動された「儀間きみさん」のこと。女の仕事として沢山の生命の誕生の手伝いをしてきた「産婆さん」の仕事。貧しい農村の人々と家族の為に衣類を拵えてきた女達の機織の工程等は大変な作業だったですね。特に機織は各地に生徒さんが出来て後継者となっておりますね。大宮町の農民歌舞伎の大幕つくりには、遠い所を通つて二百年前の大幕に変わつて二〇三百年後まで使われ物が出来ました。私や妹にも声をかけてくれて、その都度少しの手伝いしかなかったにもかかわらず名を入れて貰いました。孫と参加した事は孫の心の中に貴女の姿を紡いでいったことでしょう。

玉里の古文書講座が始まつた時、参加したのは五十代に入った頃でした。古文書の勉強は当時の字に慣れる事（字を数多く見る。辞書を引く）予習、復習を確りやる事でした。私はそれらを疎かにしている生徒でした。その後村内の古文書を調査する買いが組織されました。講座を長くうけた

人、各地区から一人づつ。了承を得て、当時の館長さん、土浦在中高崎出身の生徒と十人のメンバーでした。古文書は、その土地の人達の財産で先祖の生きてきた姿、暮らしを物語るものだからこそ、その土地の人が読むという姿勢でとりこんでいきたい。大切に扱う気持ちだが、次の世代に伝わり残っていく事になると教えてもらいました。

石佛調査をした物の中に年号の間違いのあったのを発見したのも貴女でした。それからは前に調査した物を全部見直す作業でした。間違いの儘印刷されたら大変な事だったので。合併前の村史編纂の際も尻拭いをする結果となりました。村が依頼した県の肩書を持った方が請け負われた様ですが、土地の事を知らないで、机上の原稿で村の歴史が語られる所でしたね。間違い見つけ、訂正した人の名は載せて貰えないのですね。地元の人材を見つけないで肩書のある人の方が大事なのかと思ひ知らされました。八郷町も合併前に町史を作りたいと、貴女の所にお話に来た人達を偶然見ました。（今から何年かかけて仕上げる事があるのでは、無責任なお引き受けは出来ません）とお断りしていました。貴女の力をよく知っている方達だったからこそお願いに来られたのでしょうか。三人は肩を竦めて帰つて行きました。当村との対応の違いを見せつけられました。

一通済むと「玉里御留川」への取組が始まりました。何年かかけて仕上げる事と八郷の方にお話ししていたのはこの事だった。それは古文書の集大成として玉里での最後の仕事としての取組みと感じました。この仕事が終わつたら長野へ行く事になるだろうと、心の奥に不安の火種が点つたのです。玉里の近世の歴史の中で玉里御留川、稗藏、

は大きな特徴で、知っていて欲しい。それは学んで欲しいという事でした。稗蔵の事は大部前に青森まで行って現存する物を見たり、土地の話しを聞いて来てまとめてくれました。いよいよ御留川に手がかりました。公的な援助は場所代の免除だけ、コピーから総て、十人の月五千円の会費(出版の時の為の積み立てを含む)で進められました。作業内容も多面にわたり、関係した資料の展示の見学、川守宅から預かった沢山の文書の読み取り等今迄にない厳しいものでした。でも貴女と一緒に出来る事が楽しくて、毎回毎回が心弾む日々でした。そんな時私の甘えが出て難しい事に対して(何でこんな難しい事させるの。私の能力のないことを分かっているのに)と逆切れしている自分がいました。自分の努力の足りなさを棚に上げて申し訳ないことです。帰りは優しい言葉と笑顔で別れました。救い難い私を何度も救い上げてくれる菩薩さまに思えました。指導する人の大変さがつくづく分かった時でした。大綱引きと神事の絵図が鈴木家から出てきた時の貴女の感動した姿を覚えています。涙を見せた事のない貴女の目に光る物があったのを。文書の中に大綱と出て来ても実証出来ない和小声で言っていた事があったのです。この絵図によって実証されたと喜んでいました。五年の年月と自費による出版が終わり、心ある方へ少しでも本をお届けするのが、私達あとに続く者の仕事です。

二十年位かかった玉造町大場家の古文書も目録がこの十一月に仕上がりました。ご苦労さまでした。前々から二三人声かけて古文書の実話を絵本にしたいという貴女の夢は敵わないままでした。ところがその事を忘れずに妹に二枚の絵の依頼が

ありました。長い時を刻み、多くの人々の出入りしたあの土間の一隅に飾られています。そこには貴女が人を大切に伸ばし、育てる心の籠った光が見えます。

いよいよ新しい土地への出発。玉里からお嫁に行く祝賀会”と故事付けての集いは楽しかった。何故か七十代前後と六十代に入った年代の十四・五人長い長い付き合いだった仲間だった。力を沢山貰いました。皆これからの人生に向かって再出発と誓い合った。故郷の山筑波山へ登ってお別れ遠足は、紅葉と冷たい空気に包まれて体力、精神力の確認を合わせた。

私は心配をかけたおしだった。私を大切に思ってくれていたのに、答えられないままにわかれる。これがとても辛い。それが不安をうんでいるのだろう。方向を見失いしなうような思いだ。

その不安を解消するような事が二三日前あった。四人分の宿題だった。添削してあげるから送ってね。最後の助け舟をくれた。

十月十五日の夜三味塚古墳に登って、月の出を見、国見をしてわかれようと待っている。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。
オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel

「コーヒーフレイク」

「ピロリ菌の功罪」 菅原茂美

人体の総細胞数は約60兆個。人間の遺伝子数は約25000。しかしヒトは自分の遺伝子のみでは生存できない。一方人体に寄生共生する細菌は約1000種。その遺伝子数は300万。細菌の総数は1000兆個と言われる。人体はその細菌の助けにより生存ができる。例えば、ビタミンB₁₂を作る遺伝子は人間には無いが細菌が作ってくれる。更に植物繊維の多糖類をブドウ糖にまで分解して吸収できるのもバクテリアのおかげである。

さて、らせん状のヘリコバクター・ピロリ菌は、1983年、オーストラリアのウォーレンとマーシャルにより発見された。彼等はピロリ菌の感染は、胃潰瘍胃がんを引き起こすと発表。マーシャルは、培養したピロリ菌を自飲実験で急性胃炎を発症し証明した。しかし除菌をすると、胃がんは防げ、食道がんが増えることから、ピロリ菌には食道がんを抑える効果があることが示唆された。

ニューヨーク大学のブレイザーは、胃が分泌するホルモンで食欲を増進する「グレリン」は、ピロリ菌が分泌をコントロールしていることを発見した。ピロリ菌を除菌すると、食欲増進と抑制のバランスが崩れ、肥満者が増える。現在アメリカでは、新生児の3分の1が帝王切開で生まれ、母乳を飲まず育てられ、子供のピロリ菌保有率は6%に過ぎず、肥満児増加の一因ともいわれる。その他、子供は中耳炎・蓄膿症・力ゼなどで抗生物質を多用され、色々の共生菌がダメージを受け、腸内での樹状細胞やT細胞の免疫機能の連携が損なわれていると言われている。

【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

第四章 霧の中の栄光 (4・1)

官仕えをしていれば上司に勤務評定をされるのは当然だが、職域で古狸のようになると凶々しく「サービスして頂戴よ！」と買物並みに注文を付けたりするけれども、上司のほうでも心得ていて「お前のような奴は評定のしようが無い！」と突き放されてオチになる。果たして評価は良くないであろうから、上を気にせず自分の思うように仕事ができる。実に有難い職場環境であった。

西暦一六〇〇年という区切りの良い年に行われた関ヶ原の合戦では、大小を問わず日本中に居た武将たちが思いもかけず徳川家康に厳しく勤務評定をされることになった。この場合は、それぞれの功績と反抗・非協力の程度でプラス・マイナスの禄高査定を受けることになったのであり、これを勝手に区分してみると次のようになる。

「A」は三十万石以上の高額加増で、家康の次男にして豊臣秀吉の養子になった結城秀康が六十五万石増えて越前福井に封ぜられたのを筆頭に、四男の松平忠吉が四十二万石増えて清洲へ移り、蒲生秀行が同じ加増で会津へ行き、池田輝政が約三十七万石増えて姫路へ、黒田長政が三十四万石増で福岡へ、そして山形の最上義光は領地をその俣で三十三万石も増やして貰った。家康の子が優遇されているのは「神君」などと称されても徳川家康は普通の親馬鹿に過ぎなかった証である。

「B」は十萬石以上の加増で、福島正則が三十萬石弱の増で広島に封じられたのを始め、熊本の

加藤清正が二十七萬石増え、浅野幸長、山内一豊、藤堂高虎、加藤嘉明、田中吉政など豊臣の家臣であった武将たちが十名ほど大大名になっている。また、家康の孫に当る奥平家昌が十萬石で新たに宇都宮を貰った。なお奥平氏は源氏系だが途中から桓武平氏に替わったという妙な家系である。

「C」は加増額が十萬石に満たない武将であり、小早川秀秋(岡山)、堀尾忠氏(松江)、蜂須賀至鎮(よししげ・徳島)、井伊直政(彦根)、寺沢広高(唐津)、中村一忠(米子)、京極高知(丹後宮津)、真田信幸(信濃上田)など百人近い数の武将がこれに該当しており、中には加増額が五千石から二千石程度の者もいる。

「D」は領地を削られた武将で「その一」でも触れたが、九十萬石を削られ会津から米沢へ移された上杉景勝を始め、八十三萬六千石を減じられて広島から萩へ国替えされた毛利秀就、そして三十三萬九千九百石という際どい大減封で水戸から秋田へ飛ばされた佐竹義宣、五萬石を減らされたけれども雪国の秋田から宍戸へ来て暖房費が浮いた秋田実季と、この四氏がこの項に該当する。

「E」は、スッキリと領地を全部取られた大名であり、岡山の宇喜多秀家(五十七萬四千石)、土佐の長曾我部盛親(二十二萬二千石)以下、西軍(石田三成軍)に属した九十人の名前が挙げられていて没収高合計では四千数百万石になる。ここに登録された者の中には、領地だけでなく生命まで減じられた気の毒な武将もいる。

其の他に場所替えは有っても禄高は現状維持という大名が居て、薩摩の島津(六十萬石余)、佐賀の鍋島(三十五萬石余)、越後の堀(三十萬石)、信濃松代代森(十二萬石)、陸奥盛岡の南部(十萬

石)のほか、十萬石に満たない地方の大名と徳川の重臣など七十家近い武将がこれに入る。

島津などは当主の弟で大将の義弘が、石田三成の軍に加わって井伊直政の軍勢と死闘を交えながら関ヶ原を脱出して壮烈な帰還を果たしている。それでも「領地増減なし」で済んだのは奇跡に近いが、これには幾つかの理由があるので人間の運命も、ある程度は自分の行動に由来する場合があるという見本であり、島津の対応が興味深い。

豊臣秀吉の狂気から始まった朝鮮半島出兵では秀吉の死により、徳川家康が発した帰還命令でやつと日本の将兵が現地を離れることになったのだが「出兵賛成派」が多かった西国武将たちの中で、島津義弘は反対であったらしく、その辺の考えが家康と似ている。秀吉から動員令を受けた家康が急に機嫌を悪くした話が伝わっている。

関が原合戦の本番前には石田三成が家康の選挙事務所が有った伏見城へ軍勢を差し向けたのだが既に家康は上杉景勝討伐の名目で奥羽地方を目指して小山辺りまで進んでいる。「景勝が軍備を増強している」という口実であるが、これは石田三成の挙兵を督促するものであることは当時の誰でも知っていたらしい。伏見城の留守を預かるのは老臣の鳥居元忠であり、城中には僅か二千の兵しか居らず、家康とは水盃を交わして既に「捨て石」となる覚悟が出来ている。西軍の増田長盛が使者を出して「この城は豊臣氏の城であるから貴公が明け渡して立ち去っても非難する者は居ないから」と、不動産屋に頼まれた立ち退き執行人のように申し入れたけれども、元忠は「私は主君の家康に命じられて守るので、他人の言うことは聞けない」と小学生にも分かる論理でお断りした。

鳥居元忠は、このことを直ちに奥州へ進軍中の家康に急報したから、家康は伊達政宗、最上義光など東北地方の大小名に後を任せて関ヶ原へハターンしたのである。結局、伏見城は大軍に攻められ鳥居元忠以下の守備隊が良く守ったけれども、西軍の将・長束正家（なつかまさいえ）が、忍者の集団を使った卑劣な裏工作をしたことに依って落城する。此の時に寄せ手の中に居た鳥津義弘は密かに城中の元忠に対して味方になることを申し入れたらしい。（断られたようだが：）

さらに関ヶ原の戦場では鳥津義弘の軍勢が石田三成の軍や小西行長・宇喜多秀家連合軍の直ぐ近くに配置された。店舗で言えば目抜き通りだが、戦場では真つ先に狙われる場所である。果たせるかな合戦が始まると、東軍の兵は先ず石田陣営と小西・宇喜多連合軍の陣に攻め寄せた。勇猛の評判があつた鳥津屋の店頭にはお客さんが来ない。隣の陣地で壮烈な合戦の実演が展開されるのを無料で観戦していた。そのうちに、西軍総大将の石田三成が使者を出して救援を要請して来た。

その使者が、馬に乗った俣で口上を述べたため鳥津の家臣たちは「戦場の礼を欠く！」と怒って使者を追い返した。石田三成は切羽詰まって自ら鳥津陣営に向き援軍を要請したのだが、副将の鳥津豊久（義久の甥）は「御覧の通りに、こちらも手薄で、とても援軍など出せない！」と言って、如何にも暇そうに欠伸（あくび）をしながら動くともしない。是を見た石田三成は肩を落とし、修羅の巷と化した自分の陣営に帰って行ったのである。西軍の負けはこれでも分かる。

こうして、鳥津軍は戦闘が開始されても見物をする側に回ってノンビリとしていたところ、真面

目に合戦をしていた軍勢が回りに入り込んできて戦場を離脱出来なくなってしまう。今さら徳川の陣に行つて「遅くなりましよ」などと言つても西軍陣地に旗を立てていたから信用はして貰えないであろう。鳥津の軍勢も進退きままつた。

やむを得ず家康が居る正面を強行突破して戦場を離れたもので、その時に追つてきたのが、徳川軍の中でも全員が消防隊員と間違われる「赤い武装」で固め「赤備え」として強豪ぶりが知れ渡る井伊の軍勢であり、さらに悪いことには家康の息子の四十二万石を増やして貰つた忠吉が、直政の娘婿として合戦の見習いで井伊の軍勢に加わつていた。勇猛の鳥津と赤い強豪が戦うのであるから田舎芝居のように恰好だけと言う訳にいかない。双方にかなりの犠牲者が出たのである。その際の疲れが原因か、増えすぎた領地が原因かは分からないが、松平忠吉は若くして他界し、その後は弟の義直が継いで御三家の筆頭、尾張藩主になる。

鳥津義久は帰国してからひたすらに恭順の姿勢を示し、一族が揃つて深くお詫びをし、家康に敵意が有つての参戦では無かつたことを充分なシナリオを書いて釈明したのが認められたのである。

つまり、合戦の始まる前に、鳥津義弘は東軍（徳川方）に味方するつもりで九州からやつて来た。ところが戦場の手前で西軍（石田方）に遭遇して、頭から「遠路、御苦労さまでした」と出迎えられてしまい、「実は貴方がたと戦つたために来たのです……」とは言えなくなつてしまったことにした。

薩摩藩が好運だつた一方では、似た様な行動をした毛利秀就（ひでなり）が八十数万石という大減俸を喰らっている。毛利は秀吉との関係で出陣したが戦闘には全く参加していなかつたらしい。合

戦は「戦つて幾ら……」の商売であるから、選挙の応援と違つて顔だけ出せば済むというものではない。不運としか言い様の無い毛利氏は家康の処置を恨みながら面従腹背し以後、新年には歴代の藩主が早起きして「打倒徳川」の祈禱を続けていたと伝えられる。やがて薩摩・長州の二藩が原動力となつて明治維新が起つたことを考えると人間の深い恨みは百年二百年では消えないらしい。

客観的に見ると、この様な賞罰にしてもそれを行う者の不公平な判断で、受ける側には大きな開きが出てくる……と言うより「運、不運」がある。特に戦国時代に入つてからの団体戦となる合戦の評価などは、一人一人の働きが正確に見られている訳では無いと思うので公平にはいかない。豊臣家が滅亡した「大坂夏の陣」に徳川家康の身辺を護る旗本衆の勲功査定（加増）を記録した名簿でも四、五人から数十人規模のグループ中の何人かが「御加増なし」とされている。將軍の食事係やトイレ係さえ四、五百石の加増を受けているのに戦闘要員の功績が認められて居らず、中には千石並みの手柄を立てたけれども親が懲戒処分を受けていたから「0」という理不尽な記録もある。

世の中、何事も「公平」などとは言い切れない要素が大きいのであり、藤原一族から始まり、その後には権力を振りまわした平清盛・源頼朝・北条一族・後醍醐天皇・足利一族から織田信長、そして豊臣秀吉・徳川家康など、いずれも天下人に選ばれたと思ひ込んでいたけれども、当時の国民は誰一人として「日本をお願いします」などと頼んではいなかった筈であり偶然に「悪運が強く」権力の座に就いたに過ぎない。

「悪運が強い」と言う印象では、徳川家康と肩

を並べる人物のように思えるのが伊達政宗であるけれども「その一」で述べたように、関ヶ原合戦の恩賞では僅か二万五千石の増加しかなかった。「上杉を圧迫する↓石田三成が挑発されて立つ」という関ヶ原合戦の重要な筋書を積極的に実行したのは伊達政宗だけであるから、功績は「A」クラスなのに勤務評定は「C」グループにされた。領地は仙台の俣であったから引越しはしなくて済んだが、家康が目論んでいた役目を完全に果たした功績からすれば最低でも十万石ぐらいは頂きたいところである。多分、上杉領への挑発侵略が積極的過ぎて「過ぎたるは及ばざるが如し」と言う諺が勤務評定を下げる結果になったらしい。伊達氏は政宗の代に急速に勢力を伸ばし、桓武平氏系（三浦系）の豪族・蘆名氏を倒して会津城を奪ったため現在の宮城・福島両県に及ぶ領地は百万石を越えていたのである。ところが蘆名氏は豊臣秀吉に服属していた。程なく「直ちに上洛せよ」という使者がやって来た。これを無視すれば秀吉の軍勢が攻めて来る。現代の政府でも企業でも何か有れば対応する以前に先ず会議を開く。戦国時代でも同じで、政宗以下が「会津城会議」を開いたけれども結論は出ない。

域であつたらしい。本城は米沢になる。しかし、これだけで落ち着かないのが伊達政宗であり、いわゆる豊臣秀吉の「奥州総検地」により各地に起こった反乱に関わった疑惑を持たれることになる。その結果、又もや領地替えを命じられて、貰った場所が反乱の起きた宮城県北部なのである。正直なところ、伊達政宗が反乱軍にどの程度の関与をしたかは不明らしい。現代で言えば大物政治家の政治献金問題程度のことであり自分で札束を数えたり、領収書を発行したりはしていないのである。秀吉のほうでは金で言えば五億や十億の小銭の問題として、自分で解決するように反乱軍の討伐を命じた。追い詰められた政宗は鬼と化して反乱軍の掃討を行い、武士はもとより城に立て籠った者、女子供まで数千人を殺害した。其処までして得た五十八万石に、関ヶ原合戦の功績で二万五千石を貰ったから伊達氏の領地は六十万石には届いたことになる。ところが関ヶ原合戦前の作戦の段階で、家康は五十万石に近い加増を約束していたとする説があり、それが実現すれば秀吉に五十万石をとられる前の禄高に戻り、伊達政宗は百万石の大名になっていたのである。それを保証する「百万石のお墨付き」なる文書が現存するそうである。

略」の内容は、政宗が奥州に居て上杉を牽制する約束である。態度のハッキリしない上杉景勝を政宗が押さえていてくれれば家康にとつて百万石は安いものであるが、怪しい活躍が過ぎたのである。「東国太平記」によれば、政宗が上杉を挑発し過ぎて激しい合戦になり、その上に政宗が大敗を喫したようで、これでは話にならない。もう一つ、政宗が百万石になる機会があったのは家康との縁組であり、既に述べたように息子・忠宗の奥方として、家康の最後の子・市姫を貰う約束が出来た時であるが、その話は市姫の夭折により消えてしまった。しかし、それ以前に「五郎八（いろは）こ」と言う男の子と間違うような名前の姫が伊達家から家康の六男・忠輝に嫁している。通常ならば、このラインも伊達家興隆の原動力になる筈であった。ところが越後高田に七十五万石で封じられたこの婿さんは「大阪冬の陣」に江戸城守備を命じられたのが不満でグズグズしたり、大事な「夏の陣」では北陸軍の総指揮官を命じられながら遅刻をするなど、慎重な徳川家康に似ないで何となく危ない行動をした…とされている。保育園児の朝寝坊と違って、武将が合戦に遅刻することは重大事であるが、関ヶ原合戦に別ルートで向かった秀忠（二代将軍）でさえも途中で真田幸村を攻めめぐねて遅刻しており、家康から大目玉を喰らったが処罰は受けなかった。同じ遅刻でも、忠輝の場合は意図的な遅刻と認定された。その上に関ヶ原へ向かう途中で有る事件が起こりその対応が家康や秀忠に対する反抗とみなされたのである。遅刻だけならば舅である伊達政宗が家康に懇願すれば或いは減封ぐらいで済んだかも知れないが、事件の内容が重大過ぎた。

大阪夏の陣は、徳川方の勝利が織り込み済みのような戦さであるから、家康も秀忠も慌てずに戦場へ向かった。松平忠輝は大阪冬の陣では江戸城を守らされて拗ねていたけれども、今回は一軍の将としての出陣であるから心機一転、早めに出発すれば良いのに、恰好を付けてゆっくりと出陣してきて途中で早くも合戦が始まったという情報を得たため、慌てて美濃路から守山の駅まで来た。

徳川時代初期に書かれた「難波戦記」によれば、その時に五、六人の家臣を連れて行く旗本に追いついたらしい。先陣の兵が「將軍家の御連枝の行列である。下馬せよ！」と怒鳴ったところ、その一行が「我らは二人の主を持たず：何ゆえに下馬すべきか：」と言って、その俣、行き過ぎようとした。それに腹を立てた忠輝の家臣たちが先行の旗本たちを襲撃しようと取り囲んだ。囲まれた旗本たちは小勢であるから思わず太刀を抜き、双方が対立したけれども、行列の人数が圧倒的に多かったため二人の武士が斬られた。この事件のために松平忠輝は合戦に遅れてしまった。伊達政宗は本多忠政や水野勝成らの武將と共に先に戦場へ来ていたので事件を防げなかったことになる。

関ヶ原の戦いが終り、將軍・秀忠が京都から江戸へ戻る際に、長坂丹波守という側近の旗本が秀忠の籠の前に蹲って（うづくまって）動かない。不審に思っって声をかけると、丹波守は「恐れ多きことながら：」と前置きしてから「守山で松平忠輝卿が理由も無く二人の武士を殺害されたが、その一人は今回の合戦に出陣して来た自分の弟である」由を申し述べた。驚いた秀忠は江戸に着くと直ちに高田藩の重臣数名を呼び付けて糾問した。

重臣たちは藩の安泰のために、旗本を斬った二

人の武士を犯人として幕府に引き渡すことを考えたけれども、この処置に対し犯人とされた武士は「今回の沙汰は主君への忠義を不忠とするもの」として承服せず、脱藩して江戸に行き逆に高田藩の内情を幕府に告発したのである。それによれば藩主の忠輝は重臣の花井主水正（もんどのかみ）の言いなりで花井は贅沢を尽くし、夏の陣でも戦場到着が遅れはしたが「残る敵に夜襲をかけよう」とする部下の進言を要れずに、合戦に加われなかった：というものである。幕府は花井と告発した二人（旗本を斬った二人）を対決させて、結局は花井が負けた。これにより藩主・忠輝と花井の落ち度が明確になったのである。秀忠は調査結果を駿府城の家康に報告したのだが、家康はさすがに父親であるから「功なかりけるや？（出陣した高田藩として、忠輝に何か功績は無かったのか？）」と花井主水正に質問をして来た。これに対して花井は嘘か誠か、次のような内容の回答をした。

松平忠輝の軍勢は関ヶ原への出陣に本隊が遅刻はしたけれども、先手の隊の一部だけが先行していて道明寺表という合戦場で敵に遭遇した。小規模な戦いではあったが一応は戦闘に参加し、これを本隊へ知らせた。本隊は、遅ればせながら先手に合流して戦おうとしたところ、関ヶ原入りしていた伊達政宗から「本隊を出すな！」という指示が来たため其処に留まり、結果的には戦場に遅れることになってしまったのである：と。

合戦当時の目付役に確認させたところ、花井の言うことに嘘は無かった。善意に解釈すれば忠輝の舅である政宗が、娘婿の身を案じて前線に来ることを抑えたと思われるのだが、例によって不可解な行動をとったものと誤解される。尤も、此の事

を記録した「難波戦記」の記述内容が重複していて微妙に表現が違うので、頭から信用は出来ず「何が有る？」と思われなくも無い。

この問題に頭を悩ませた所為かどうかは分からないけれども、血圧が上がった家康は元和二年（一六一六）三月に倒れ四月には七十五歳の生涯を閉じてしまう。不始末を怒りながらも忠輝を助けたい家康が死んでしまったので、將軍・秀忠は父の遺言として忠輝に所領没収、伊勢国に流罪を申し渡した。その後で流罪の地が諏訪に移されたが、其の地で忠輝は死んでいる。死因は不明であり二十代後半の年齢なので、その行動と言動が危険視された結果、勤務評定が「X」になった？

市姫のこと、忠輝のことは伊達政宗にとって不運としか言いようがないが、関ヶ原合戦に伴う裏稼業のような仕事の百万報酬が僅か二万五千にしかならなかったのは痛いと思う。しかし、この二万五千石裁定に対して政宗は文句も言わず不平も溢さず、ひたすらに「チャンス」となる悪運が巡って来ることを願う家康に忠誠を誓っていたのである。そこには政宗が絶対に隠し通さなければならぬある秘密があったからこそ、じつと耐えていたと推測できる。さらに婿の松平忠輝が没落した事件「X」については伊達政宗が絡んだ裏の話があるけれども、その内容が大き過ぎるため、先ずは前座として「その一」で触れた「豊臣秀吉の奥州征圧・総検地」に際しての政宗の怪しい活躍をもう一度検証していきたい。其処に見られる伊達政宗の行動は、松平忠輝の改易・没落に関わる疑惑とも共通する何とも理解し難いものである。

奥羽地方のエースとして頭角を現し始めた伊達政宗に難題が振りかかるのは、石岡に頑張って居た

と言うよりも歴代相伝の領地を失い辛うじて府中城だけにしがみ付いていた大掾氏が、豊臣秀吉の許可を貰った佐竹氏に潰された天正十八年（一五九〇）のことであり、その時は伊達政宗だけでなく、東北方面に居た中小の豪族にとっても最悪の年になったのである。

振り返ってみると大掾氏のように「小田原へ行かなかった」武士団が東北地方にも数えきれない程いる。大部分の武将たちは情報不足で小田原行きの意味も豊臣秀吉なる武将の存在価値も知らずに「どうしようか？」ウロウロして居ただけで過酷な処分を受けたのであろう。現代なら国会でウロウロしていれば「先生」として高給が貰える。時代の差は不平等である。愚痴は止めて、常陸国で言えば、早くから石田三成にお中元やお歳暮を贈っていた佐竹氏だけが早々と情報を掴んでいて対応ができた。佐竹は、それを他の大名には知らせず、逆に自分の領地拡大に利用した。

関東地方には、石岡で名門を看板にして当時の政局が読めず小田原の北条派と看做されていた大掾氏のような中小企業業の武士団は大勢いて、その誰もが世間知らずである。情報がスムーズに伝わって来ないから、秀吉が北条氏に勝つとは予想できなかった。東海道の終点である常陸国でさえも豊臣株を買った武将は佐竹ぐらいであるから東北地方の武士たちの認識不足は当然である。

豊臣秀吉は、天下を統一した自分が鎌倉幕府を開いた源頼朝とは対等だと思ひ込んでいたから、頼朝が執着した東北地方に興味があつて関東地方などは眼中に無かつた。さらに北条氏を攻め滅ぼした後は家康の地盤であつた東海地方を取り上げるつもりであり、既に述べたがその代りとして、

どうしても良い関東を徳川家康に与えたけれども家康を百%信用していないから、実際に呉れた国で満足なのは武蔵、相模、伊豆、下総、上総ぐらいのもので上野、下野は有力武将と同居のような状態で与えた。一番に豊かな常陸国は入っていないからなのである。これでは、鮪一匹と言われながら「トロ」の部分が抜かれたようなものである。魚河岸で詐欺にあつたような家康であるが、そこは我慢して自分の領地に素早く部下の大小名を配置したから混乱が起きなかつた。つまり常陸国は秀吉にも家康にも見捨てられたことになる。

（続く）

【風の談話室】

早いものでもう一年が過ぎてしまいました。平均年齢の高い当風の会のメンバーには、変わりがなく元気に悪態などを吐いてこられたことに、唯感謝するばかりです。

長らく当会報に「茨城の縄文語地名」を連載頂いていた鈴木健児が、先月号の十話を持って休筆されます。残念に思われます。

先月号からは、会の平均年齢を若干下げて頂く木進村さんの入会で、少し風の流れが変わってきました。このことは当会にとっては「万歳！」です。

編集者の勝手に「ヨイシヨ広場」を設け、陸平をヨイシヨする会の皆様、特に田島早苗様には一年間ご投稿いただきましたこと、嬉しく思っております。

来年も変わらずご投稿いただけますこと、お願い

申し上げます。

【ヨイシヨ広場】（陸平をヨイシヨする会）

心を映しだす鏡

田島早苗

震災地は二度目の師走を迎え、まだまだ復興には程遠い。心も体も厳しい寒さに立ち向かおうとしている被災民の現実を目を背け、党利党略私利私欲まみれの思惑が絡み、小さな政党が乱立する総選挙が始まった。国民は誰に国を託そうかと、大きなため息をつくばかり。そんなとき、タイムリグ良く、地球一番「世界一小さな共和国」と言うテレビ番組を見た。

半径五キロ、端から端まで二十分の、海と山に囲まれたミニ国家「サンマリノ共和国」には職業政治家は居ない。たった六十人の議員が、半年ごとに選んだ二人の元首が、国民の希望や請願書を直接受けて、最善の方法を見つけ、議会の承認を得ると言う方法で血の通った政治が行われる。元首には誰でも立候補ができ、選ばれた人は、自分の本来の仕事を半年間休み、元首としての責任を全うする。半年の任期が終われば又元の職業に戻る。以前元首だったごく普通の市民に一杯出会える不思議な国だ。

この小さな共和国は国連にも加盟、千九百六十年からすべてのオリンピックにも参加している。世界一犯罪が少なく、頼ってきた者に救いの手は差し出すが、しっかりと中立を守り、六百年間一度も戦争がなかった。

裁判所では小さい国故、身内に行き当たり易く裁判が不公平にならないように配慮して、裁判官

は半数以上が外国人だと言うのも驚きだ。年間二十万人の観光客が訪れ、元首経験者のガイドさんに案内されて、国内で一番速い乗り物、ロープウェイで小高い丘に建つ当の天辺に登れば、小さな共和国を取り巻く国境が一目瞭然、この国の小ささを実感できる。

国民が誇りを持って幸せに暮らす国サンマリノの人々の輝く笑顔が印象的だった。

いくらきれいな事言っても、心を映し出す顔は嘘をつかない。しっかりと見定めて一票を投じたものだ。

さて平成の大合併で、県下に残る二村の一翼を担っている我が美浦村では、門脇教育長の推奨される「社会力」学ぶ会が半年の講座を終え「望年会」と銘打った会合がもたれた。私達ボランティアのお話を聞く事が出来た。さすが社会力を学ぼうという気概を持った人達の会は、しっかりと自分の考えを述べる事が出来る人達ばかりで、刻のたつのを忘れるほど盛り上がった。人々の輝く顔を見ながら、若い人の顔が見えない村の現状を嘆いていた婆の心配は杞憂だったかも知れないと胸をなで下ろした一夜だった。

心を映し出す顔はごまかしが利かない。テレビで久しぶりに見る役者のいぶし銀のような輝きを見ればその素敵な精神生活を想像してホッとする。昔の美形が無残に崩れた様子を見れば心が痛む。私も人生の終焉は人々に安らぎを与える顔で迎えたいが??

【ことば座だより】

涸れた龍の涙がくれた次の夢

小林幸枝

今年最後の公演が終わった。この公演で満6年が過ぎた。長い6年間だったようでもあり、あっという間だったような気もします。

音楽を担当して下さる方も、オカリナの野口喜広さん、パーカッションの矢野恵子さん、ギターの大島直さん、ピアノの山本光さんと色々な方にお世話になりました。そして今回は、クラリネット奏者の橋爪恵一さんとのコラボレーションとなりました。

私は、クラリネットという楽器の音を知りませんでした。初めて傍で聞いて、音そのものは全音域を聞く事はできませんが、優しく心に響く感じは良くわかりました。今までご一緒させて頂いた楽器の中で一番きれいな音として感じとることが出来ました。

今回は、東京から壘者の友達が大勢来てくれて、初めて観た人は何時もの私の雰囲気でないのびびりしてました。また、朗読とクラリネットと手話の舞がどうしてぴったりと合うのか不思議がっていました。手話劇とか手話ダンスはみんな知っていますが、朗読手話舞を見て本当に感動を与えてくれる表現だとお褒めも言葉を頂きました。

わたしは、健聴者も聴覚障害者も一緒に楽しく楽しめる表現者であることを改めて自慢したいと思いました。

今回の朗読舞劇は「涸れた龍の涙」で、龍が常世の国に失望して、自分の故郷である龍の星へ帰

るといふ話でしたが、クラリネットという初めての楽器とのコラボレーションで、龍から次の新しい夢を貰ったと思っています。

今年、中国マカオの公演が中止になって残念な思いをしましたが、結果的には中止になって正解でした。6月の公演には、NHK水戸局から取材を受けて、朗読舞の紹介をしていただき、大勢の人に知っていただけました。

今、来年には東京公演を実現させようと計画が進んでいます。今年には私にとって嬉しい一年でしたが、来年はもっと素敵な年にしたいと思っています。

進化を止めない様に

白井啓治

死んだらいつまでも寝てられるんだから…そんなことを嘯いて我武者羅に書きなぐり、仕事をこなしてきたことがあった。しかし、今は寝ることも自分の生きている重要な証であり、生きる意義であろうと思っている。それで今は、本当に自分のやりたいことを「生」を思いながら、ゆったり、悠然とやって、目覚めれば朝、を感じていこうと思っている。

ところが、「ゆったり」と「悠然」というのは実に難しい。石岡に越してきたのは、何にもしないことの為の予行演習のつもりで、三年の腰掛の予定でやって来たのであった。しかし、腰掛どころか終の地になってしまい、終日のたりのたりを阻害する劇団まで始めてしまったのだから、我ながら呆れ果てている。

小林幸枝という不思議な表現の才能を持った聾

の女性に出会い、朗読手話舞という舞台表現を創出し、仕事を離れて、純粹に自分の暮らす地の文化創造のための劇団、ことば座をつくる事になったのであった。

そのことば座もこの12月1、2日の公演で丸6年となり、創作舞劇も31話となった。この劇団の創設によって良質の仲間達との出会いが生まれ、次第に活動のスケールが大きくなってきたのであった。特に美浦村の市川兄との出会いは、柏木久美子さんという現代舞踏家との縁結びとなり、小林幸枝との共演を頂く事となった。

柏木さんとの出合と共演は、新たな因縁を転がすことになり、お互いに無関係でありながら深い因縁を掘り起こしてしまったのであった。

柏木さんは、モダンダンス界の巨匠伊藤道郎の孫弟子にあたり、イトウ同門会の現会長を務めている。現代の舞台を学んできた者にとって伊藤道郎のことは知らないものはいない巨星である。私は、伊藤道郎とは直接の繋がりはないのであるが、柏木さんとの共演によって、考えもしなかった繋がりが見えてきたのであった。

柏木さんから、惑星の作曲家ホルストが伊藤道郎のために、というのは正確ではないだろうが伊藤道郎を想定して作曲した「日本組曲」のあることを知り、その曲をモチーフにして物語を書いて試演してみたのであった。試演してみると、本格的に脚本を書き直し、日本組曲に舞う物語を創りたいね、と話しが広がっていった。

それを具体化するために、かつて私のアシスタントをしてくれていた女性プロデューサーしおみえりこ女史とクラリネット奏者のご主人に話しを持ちかけたのであった。そして、二度目の打ち合

わせの時であった。東京へ出かけて行ったら、先客があり、それがパントマイムのヨネヤマママコ女史。そのママコ女史、伊藤道郎には随分可愛がられ、アメリカに渡るに際しても色々アドバイスをもたらったのだという。転がり始めた縁というものは一気に大きな縁を創りだしていくものらしい。

今年最後の？ 伊藤道郎との縁の繋がり、それこそ我が足元にあった。プロデューサーのしおみ君がアシスタントをしていた頃に良く飲み歩いたフリーの女性アナウンサーが、幼稚園の頃に伊藤のおじ様に可愛がってもらった、というのであった。

全く不思議な縁の転がりである。

今、東京で「日本組曲」を主題とする舞物語を公演しようとする準備を進めているのであるが、伊藤道郎の事を調べていると、ロンドンで能の演目である「猩々」がしばしば演じられていたようである。当時は、ジャポニズムが歓迎されていた事もあり、能を主題とした舞を幾つか舞ったのであるが、この「猩々」はたびたび演じられて様である。

猩々は中国に由来する伝説上の動物で、一説にはオランウータンとも言われている。また他の説には獺がヒト型に化したものというものもある。獺説を見つけた時、恋瀬川、霞ヶ浦にも生息していたろうことが考えられることから、酒好きの獺をモチーフとして常世の国の猩々を書いて、演じてみようなどと思いついてしまった。それで、数日前に、柏木さんに来年の6月公演では「二人の猩々」というのをやろうか、とメールしたら、「ヒ口爺の思うものを書いてください」との返事。

やる事がまだ山ほど残っているのに、それを放り投げて「猩々」の構成を始めるなんて、「ゆつたり」と「悠々と」の私はどこへ行ってしまったのだろうか。

この沈滞・低迷化していくふる里に一つでもいから明日の夢を、希望を紡ぎ、進化させていくことは大切な事であろうと、自分に納得させて忙しくするのも無意味ではないだろう。

この一年を振り返ってみれば、わが「風の会」もそれぞれに意義の認められる年ではなかっただろうか。

この分ならば、最低の目標である100号は達成できるのではないだろうか。

今年は、会の平均年齢が若干であるが若返った。来年は、もっと大幅な年齢ダウンを期待したい。打田兄曰く「自分の意思を文章で伝えられるのは人間だけの特権。文章表現をしない人は人間ではない、人間放棄をすることなのだぞうだから、一人でも多くの人に自己主張を広げていきたいものである。

来年の1月号は、十一日発行となります。

「としのしつ重ねて思ひのしつ重ねて年の暮れ」

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>